

竹内博昭  
(九州沖縄農研)

【目的】

斑点米カメムシ類の一種であるクモヘリカメムシの越冬世代成虫は、スギ、ヒノキの枝葉、ミゾシダ、コシダ、チヂミグサ、フユイチゴ、ビャクシン、シダ類で冬期の捕獲事例がある(崎村・永井, 1976; 北見ら, 1976; 横須賀, 1996; 口木, 2001)。本種は冬季でも葉が枯死しない植物で越冬していると考えられるが、植物種間での越冬個体の生存率の違いは明らかでない。さらに、越冬場所と生存率との関係を解明するために網枠内への放飼試験が行われた例(崎村・永井, 1976; 北見ら, 1976)はあるが、いずれも3月頃までに試験を終えてしまっている。そこで、越冬場所とされるサワラ、シダ植物と、越冬成虫の採集事例のないツゲ類、ブナ類、サカキにクモヘリカメムシ越冬世代成虫を長期間放飼して、越冬後の生存個体数を調査した。

【材料および方法】

2001年11月8日に、1/5000aのワグネルポットに草丈30~50cmのサワラ(ヒノキ科ヒノキ属)、シダ植物、ツゲ類(ツゲ科ツゲ属)、ブナ類(ブナ科)、サカキ(サカキ科サカキ属)の5種の植物の幼苗を1株ずつ植えた。それぞれの植物は、茨城県つくば市の中央農業総合研究センターの防風林の林床から掘り採って用いた。植物を植えたワグネルポットはそれぞれ防虫網で覆い、クモヘリカメムシ雄雌成虫を10頭ずつ放飼した。クモヘリカメムシ成虫は、放飼直前に防風林の近くのイネ科雑草地から採集して用いた。放飼したワグネルポットは、建物北側の日中日陰となる場所に置いた。生存個体数は、1~7月に調査した。実験は3反復とした。

【結果および考察】

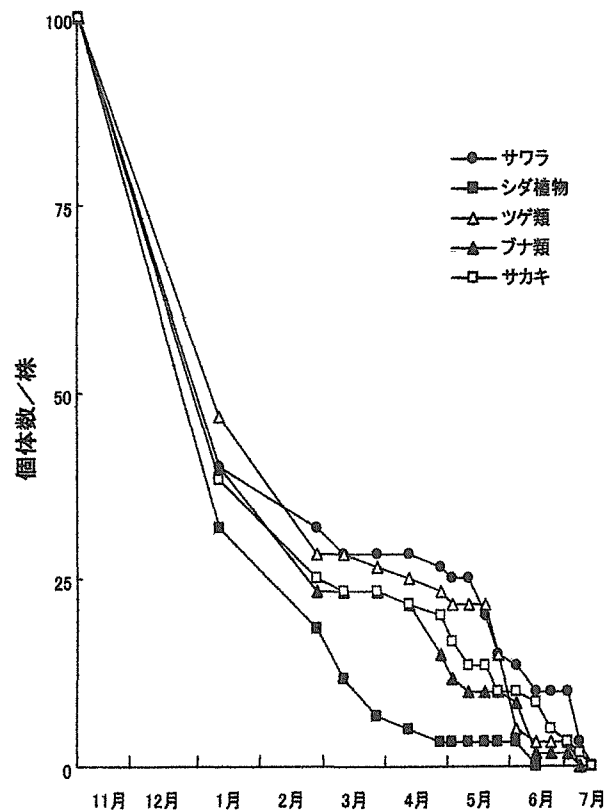
放飼期間中、ワグネルポットに植えたサワラ、ツゲ類、ブナ類、サカキは、緑色の葉が全てなくなることはなかったが、シダ植物は12月下旬に地上部が

一旦全て枯死し、翌年4月中旬に新葉が現れた。

3~4月の生存個体数の平均値は、地上部が枯れたシダ植物では大きく減少したが、他の植物では大きな変化が認められなかった。

5月以降は、いずれの植物上でも生存個体数が大きく減少した。最後の生存個体を確認した日は、シダ植物では6月7日、ツゲ類とブナ類では7月2日、サワラとサカキでは7月8日であった。

以上から、5種の植物に放飼した個体は、茨城県で越冬世代成虫が雑草地に出現する時期(6月頃)まで、生存可能なことが確認された。ツゲ類、ブナ類、サカキでは越冬世代成虫の採集事例がこれまでないが、放飼試験の結果からは、本種が多様な場所で越冬している可能性が示唆された。



第1図 5種の植物におけるクモヘリカメムシ越冬世代成虫の平均生存率の推移, 11月8日に20頭/株放飼, 3反復